

金沢大学大学院教育学研究科学校教育専攻
小松市立御幸中学校 教諭 山澤 聡美

研究主題 中学校における教育相談体制づくりに関する研究 —葛藤の理解と自己愛形成の視点から—

要約: 本研究は、中学校の教育相談において、問題を抱える生徒を援助するために臨床心理学における葛藤と自己愛の概念を導入し、①葛藤理解の視点からの生徒理解と、②健全な自己愛を形成する視点からの心理教育的援助を試み、その有用性を検討することを目的とする。そこで、中学校1学年担当教師による援助事例の経過を上記の①および②の視点から詳細に記述し、得られたデータを問題の経過および生徒の人格の変容の観点から分析し、加えて教師への面接データから導き出された教師の人格の変容の観点から分析考察した。その結果、本研究の教育相談体制が教師の生徒理解と受容を促し、生徒の人格の成長を支援することに加え、教師の意識の変容にも関連することが示唆された。今後は、カウンセリングと教育の融合という視点から、このような教師と生徒との対人関係づくりと同時に、心理教育的プログラムによる生徒同士の対人関係づくりにもアプローチしていくことが課題である。

キー・ワード: 中学生, 教育相談, 葛藤の理解, 自己愛形成

I はじめに

今、学校現場では不登校、いじめ、ケータイ・ネットへの依存など様々な問題を抱えている。また、子どもが変わったと言われ、衝動や不快な感情をコントロールできない、自分中心でないと人との関係を我慢できず自分の期待した関係や評価が得られないとすぐに傷ついてしまう生徒も増えてきている。それらが何らかの問題行動として表面化することもあれば、ひきこもってしまうこともある。このような問題を抱える生徒に対して教師は必死に向き合い働きかけているが、なかなか問題の解消へは進まない場合が多い。このような現状から、臨床心理学を学び教育相談体制づくりについて研究したいと考えた。そのためには、教師が、先述した生徒の問題の背後にある生徒の心の問題についてどう理解するのか、そしてその上でどう援助にあたるのかの視点が必要である。

最近大きな問題となっているケータイ・ネッ

トなどによるバーチャルな関係への心理的要因から考えてみると、現実の自分に自信がもてず、現実の対人関係の中での葛藤(満たされない欲求)を満たそうとすることがあげられる(小此木, 2000)。このように、生徒の問題の解決を考えるにはその背後にある心の問題に目をむけるカウンセリング的な視点が必要である。カウンセリングの理論には諸説があるが、その中核は葛藤を洞察することにある。葛藤とは、人格の未熟な部分であり、人は皆、程度の差はあれ、対人関係を歪める葛藤をもって生きている。この対人関係的な葛藤の基本形とその欲求は①基本的信頼感の葛藤:「どんなことがあっても私のそばを離れないで保護して欲しい」、②自律性の葛藤:「自分のやりたいようにやりたい。でも助けを求めたときには助けて欲しい」、③有能感の葛藤:「ひとかどの力をもっていると認めて欲しい」の3種類である(萱原, 1992)。しかしながら、このような臨床心理学の理論は教育現場に

は浸透しておらず、葛藤理解の視点をもって生徒の心の問題を理解することは、教育相談における生徒理解にも有効なのではないかと考えられる。

また、現代青年に自己愛傾向が強くなっているといわれる。自己愛について岡野(1998)は、「自分の存在を認めてほしい、大事にされたい、価値ある人間だと思われたい、という人間が持つ基本的な願望の表れ」であると定義している。つまり自己愛の最も基本的な感情は、「自分で自分を愛すること」であり、それは自信や自尊心に関連するといえる。Kohut(1971)は、両親のほめる・支えるなどの受容的な養育態度が健全な自己愛を形成させ、逆にほめられずに育った子は自己愛の発達がそこで止まり幼児的な自己愛が残るとしている。その特徴として、自分だけが偉いと思ったりそのような自己を他者に顕示したいと思う誇大自己や、対人関係における他者の目に対する過敏性などがあげられる。そのような自己は、理想自己と恥ずべき自己との両極間で不安定に揺れ動いている(岡野, 1998)。自信や自尊心をなくしている子どもが求めているのは自己対象、すなわち自分を映し出してくれる鏡としての存在であり、現実の対人関係でのフィードバックなのである。それによって健全な自己愛つまり自分はこれでいいのだという感覚が育まれる。学校現場における教師と生徒の関係においても、自己愛の育てなおしという視点が必要なのではないだろうか。上地(2005)は、学校カウンセリングすなわち生徒の心の問題への心理学的視点からの理解とそれに基づいた支援についての理論と実践の提唱をしているが、そのような実践の報告や研究の蓄積はあまりみられない。

そこで、生徒の心の問題を理解するためにどのような葛藤を抱えているのかという視点から生徒を理解し、その上で健全な自己愛を育むこと、つまりカウンセリングと教育の融合という視点からの援助が教育相談において有効なのではないかと考えた。

II 目的と方法

1. 本研究の目的

以上の問題意識から、本研究では、中学校の教育相談体制づくりにおいて、①葛藤理解という心理学的視点を教育現場に持ち込み生徒理解に生かす試みと、②自己愛の育てなおしという視点をもって援助にあたることの有用性を検証することを目的とする。

2. 研究の方法

その方法として、中学校の第1学年における問題を抱える生徒への援助事例を、①葛藤理解と②自己愛形成の2つの視点から詳細に記述する。その有用性について、問題の経過および生徒の人格の変容の観点から検討し考察する。さらに、1学年担当教師への面接を行い、本研究の教育相談体制づくりについて感じたことを語ってもらう。この教師への面接データから導き出された教師の意識の変容の観点からも検討し考察する。

III 実践事例

1. 手続き

中学1年生の担当教師に対して、学年カウンセラーとして筆者が教育相談体制づくりについて提案し共通理解を図り、その上で問題を抱える生徒の理解と援助を1～2学期間実践する。その経過を①葛藤理解と②自己愛形成の視点から記述し検討する。

その際、教育相談体制づくりについて教師間で確認した内容の概要は以下の通りである。

(1) 教育相談体制づくりのための2つの視点について

- | |
|----------------------|
| ①葛藤理解の視点から生徒の心の問題を理解 |
| ②自己愛形成の視点から生徒を援助 |

(2) 不登校に対する援助の基本態度

援助の目的を、不登校という問題の背後にある「心の危機を支える」ことに置く。

(3) 教育相談体制づくりについて

・生徒の心の理解

① 「問題」を解決するには、背後にある「心の問題」を解決しなければならない。

問題 → 解決

心の問題 → 解決

② 「心の問題」を解決するには、まずそれを「理解すること」から始めなければならない。

(生徒理解カード)

データ → 理解 → 方針

皆で討議し、衆知を結集する

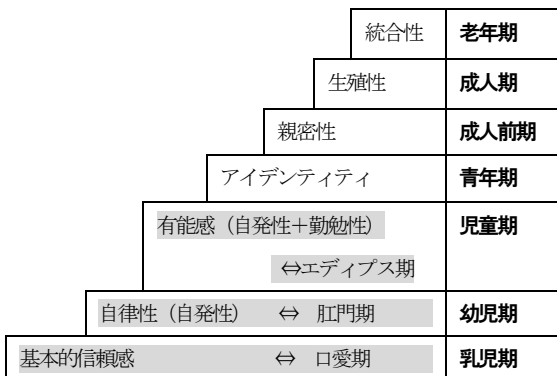
・援助チーム

担任・保護者・担任以外の教師・スクールカウンセラーによるチームで一緒にその生徒を支えていく。

(4) 生徒理解カード

氏名・学年・性別・担任・印象・性格・教室や部活動での様子・問題・家族構成・成育歴・問題の理解・方針

(5) 精神分析的人格発達理論



Erikson, E. H. (1902~1994) ⇔ Freud, S. (1856~1939)

(6) 教師による生徒の自己愛を育む関わり

「自分はこれでOK」という自信=自己愛は、人から反応されることで育てられる。

その後、1学年担当教師に①葛藤理解の視点から生徒を理解すること、②自己愛形成の視点から援助すること、③生徒の変容および人格の成長、④教師自身の意識の変容についての観点から面接を行った。

2. 事例の経過と面接データ

(1) 事例の経過と問題の理解

①事例A

【問題】部活動への不参加、不登校傾向、教師への負の反応、家庭での暴言・暴力

【理解】小学校から始めた競技への有能感の傷つきを極端に恐れる。その根底にあるのは、自分に自信がなく母への依存と反抗から自律性の葛藤が中心葛藤である。

【援助と経過】教師がありのままのAを受容していることを言葉やまなざしで返していった。教師に素直に甘えられるようになる。問題もほぼ解消してきている。

②事例B

【問題】友人間での孤立感からの不登校

【理解】対人関係で他者の目が過剰に気になり、友人や家族への怒りをおさめられない。また一人でいられないことから自律性の葛藤を抱えている。

【援助と経過】家族への反抗を経て、少しずつ自分を見つめられるようになる。登校できない日は手紙のやりとりをした。安心して頼れる対象ができ、少しずつ自信を取り戻しているが、早期の対応が課題として残った。

③事例C

【問題】備品や物の破壊、悪口、落ち着きのなさなどの問題行動

【理解】家庭の事情から母親に甘えたいときに甘えられず、基本的信頼感をもてずにいる。友人からも特別視されることが必要だった。

【援助と経過】人に対する信頼感と健全な自信を持てるよう、じっくり話を聴き認め、問題行動には教師の率直な思いを伝えていった。落ち着きがみられ問題行動で名前があがることはなくなった。

(2) 面接データ

関係部分を取り出し以下のとおり整理した。

①葛藤理解の視点から

〈葛藤理解の視点から理解してみるその過程が生徒理解を促した〉〈何らかの観点を持った方が問題を考えやすい〉〈皆で共通理解していることで安心して生徒とかかわれる〉〈生徒の心の問題、人格の変容まで理

解するのは難しい)

②自己愛形成の視点から

(認めることと指導のかね合いが難しい)

(心の交流が感じられた) (声かけや視線・態度の大切さが実感としてつかめた)

③生徒の変容

(反抗的な雰囲気なくなり素直に話しかけてくる)

(自分で決定することができる) (少しずつ自信をつけてきている)

④教師の意識の変容

(生徒のありのままを受け入れようという気持ちになった) (生徒との心の交流が感じられるようになった)

(対応に気持ちの余裕が生まれた, 対応が変わったと思う)

IV 総合的考察

1. 葛藤理解の視点からの生徒理解について

問題を抱える生徒の理解を、生徒に関するデータを持ち寄りそれらのデータをつなぎ合わせながら、どこに葛藤をかかえているのだろうという視点から見つめ、心の問題の理解そして援助方針へとつなげた。教師にとっては、葛藤理解の視点があることで生徒の心の問題が考えやすいと感じられ、また葛藤理解の過程そのものが生徒理解を促進するという点でその有用性について一致した見解が得られた。また、生徒の不登校の問題を「甘え」と捉えていた教師が、生徒の心の問題を見つめ、生徒を受容しようというスタンスに変容した。しかし、生徒の心の問題や人格の変容までを理解することは難しく、教師が学ぶことの必要性が明らかになった。

2. 自己愛形成の視点からの援助について

生徒の心の問題を理解した上で、生徒を受容し健全な自己愛を形成する視点から援助することは、生徒にとってはその存在を認められ自信をとりもどしていった点、教師にとっては安心感をもって生徒とかかわれ、生徒との相互交流が深まったと感じられた点でその有用性が確かめられた。

しかし、教師が自身の葛藤を見つめた上でしっかり自分(自信)をもって援助にあたることは難しいことが考察された。

3. まとめと今後の課題

本研究では、中学校における教育相談づくりにおいて、問題を抱える生徒の葛藤理解と自己愛形成の視点からの心理教育的援助を実践・記録し、教師への面接から得られたデータとともに検討した。その結果、教師の生徒理解を促進し、生徒を受容しようとするスタンスへの変容が確認された。そして、生徒は自分の存在を認められたと感じ自信を取り戻していき、問題の改善がみられたと考えられる。教師の適切なフィードバックが教師・生徒に相互の感情交流を感じさせ、生徒の人格の変容を支援することが示唆された。

しかし、本研究は質的データからの検討に限られており、数値的データの裏づけも必要であろう。加えて、他の心理学的理論も学び取り入れながら理論と実践の検討と蓄積をしていかなければならないと考える。

今後は、現場の教師がカウンセリングを学ぶ①生徒の心の問題を理解する力と②教師も自身の葛藤を見つめた上で生徒とかかわる力の双方を身につけていくこと、そして、このような教師と生徒との対人関係づくりと同時に、生徒同士の対人関係づくりのための心理教育的プログラムによるアプローチを行い、検討することが課題である。

引用・参考文献

- 上地安昭(2005) : 教師カウンセラー—教育に活かすカウンセリングの理論と実践 金子書房
- 萱原道春(1996) : 洞察的心理療法の方法論的考察 金沢大学教育学部紀要, 45, 149-158.
- 岡野憲一郎(1998) : 恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで 岩崎学術出版社
- 小此木啓吾(2000) : 「ケータイ・ネットの精神分析」 飛鳥新書
- Kohut, H. (1971) : *The analysis of the self*. New York : International Universities Press.